慟哭を射よ！　第一話　呼ばれて異世界、意味不明！

椎名疾風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
慟哭を射よ！　第一話　呼ばれて異世界、意味不明！

【Ｎコード】
Ｎ２５９４Ｐ

【作者名】
椎名疾風

【あらすじ】
あたし、北原和歌は、どこにでもいる普通の女子高生。
……だった、はずなのに。
気がついたら、日本地図どころか、世界地図にも載っていない場所にいた。
意味がわからない。
いきなり剣をつきつけられるし。

鬼ごっこさせられるし。
なんだか、ただいまイケメンコンテスト絶賛開催中ですか、ってくらいの美形に出くわすし。
もう最悪！
しかも、極めつけの一言

『よげんのおとめ』

ここはあえて。
そう、故意に。
意地でも。

漢字変換なんて、しないわ。

ここは何処？ー１ー

有り得ない。
まさに、その一言しか思い浮かばなかった。
だって、可笑しいでしょう？確かに、今の今まで日本の某田舎県のそこそこ有名の高校の教室で授業を受けていたはずなのに…いや、暴露すると実は寝ていたんだけど。
とにかく！自分は、教室にいたはずなのだ。なのに、何故こんな目に遭わなければならないのか。
「動くな。動けば、殺す」
目の前に突き付けられた剣。
これって、本物だよね？
「奇妙な格好をして。お前、アゾマ国の間者の者か」
「ブルイ隊長。もしかしたら、北方のアザナ帝国やもしれませぬぞ」
「ふむ。謎に包まれた北の帝王か。見慣れぬ格好だ。その可能性はあるかもしれない」
「そうでしょうとも」
目の前で交わされる会話に、和歌は頭を抱えたい気持ちになった。アゾマとか、アザナとか。何を訳の分からない事を言っているのだ、この髭の生えたおっさん達は。日本の都道府県に、そんな名前の市なんてあったっけ？
地理は得意な和歌は、目の前の現実から逃れる為に頭に思い浮かべた日本地図に耳で聞いた単語と同じ市がないかと探す事で必死に自分の日常に繋げようとする。
「とにかく。お前は、何処から来たのだ」
だから、日本だって！
そう叫べたら、どんなに幸せだっただろう。

ここは何処？ー２ー

「何故答えない。やはり、後ろめたい事情があるのか」
息巻く、中世の甲冑のような鎧に身を包んだ目の前の相手に、和歌は冷めた視線を送る。
ちょっと、こいつ。蹴ってもいいだろうか。
何故答えないかって？そりゃあ、後ろ手で羽交い絞めにされて口を塞がれていれば、答えたくても答えられないでしょうよ。それともあんた、腹話術なんて器用な真似、あたしが出来るとでも思ってるの？
なんて、言えないこの状況が恨めしい。
「もうよい。答えないのならば、無理矢理吐かせるだけだ」
馬鹿だ。
高々と言い放った自分格好いい！とか思ってるのかもしれないが、ただの馬鹿だと和歌は決定付ける。
どんなあだ名をつけようか？
馬鹿髭騎士？…そのまんまね。ネーミングセンスを疑われそう。
「では、独房に…」
「――おやおや。女性相手に、大の男が七人も」
意気揚々といった感じで踵を返しかけた髭騎士さん（仮）の言葉を遮り、何処か人を馬鹿にしたような物言いをする声が響き渡った。
思い通りに動く視線を声のした方へ動かせば、近付いてくる一人の男性が視界に入る。
陽の光を弾く見事な金髪。冬の空のような静かな蒼色の瞳。百人中百人の女性が、口をそろえて美形と言うであろう、まさに美の集大成。神の傑作と言っても過言ではない、そんな美青年だ。
だけど、神は決して人に二物を与えない。それが果たして神の意地悪なのか嫉妬なのかは知らないが、容姿が飛びぬけていい奴は、例外なく性格が最悪だ。

ここは何処？ー３ー

「それに。よく見れば、男が寄ってたかって取り合わなければならない程の美人でもない」
そろそろ例外に会いたいなぁ、なんて思っていた自分が馬鹿だった。やっぱり、美青年は皆性格がひん曲がってる。
誰が、美人じゃないですって？
「お戯れを。こんな貧弱な小娘、こちらからお断りですぞ」
貧弱な小娘？
「そうでしょうとも、ブルイ隊長。貴方程の方が、こんな魅力の欠片もない女を相手にするはずもないでしょう」
魅力の、欠片もない…？
人が黙ってれば、いい気になりやがって。よくもまぁ、言いたい放題言ってくれるじゃない。その口、黙らせたろか？
「では、その娘、私に譲ってはもらえないでしょうか？」
にこりと笑って、とんでもない事を言い出す美青年改め、腹黒大王。
あたしは物じゃないと、叫べない現状に和歌の機嫌は更に悪いものになっていく。
「ほう？物好きもいたものですなぁ」
「まだ蕾。その花を綺麗に咲かせてみせるのも、楽しいのですよ」
互いに笑いながら、何処か腹の探り合いをしている緊迫した空気に気付く余裕は、もちろん和歌にあるはずもなく。
ぷつん！と。頭の中で何かがぶち切れる音を、和歌は確かに聞いた。

ここは何処？ー４ー

口を押さえている相手の手に噛み付くなんて、序の口。まさか反撃を食らうとは夢にも思っていなかった相手の呻き声に、同情なんかするはずがない。痛みに束縛を解いた背後の相手に、渾身の蹴りをお見舞いする。

「あんた達！人が黙って聞いていれば、言いたい放題言いやがってッ。女子高生の怒り、甘くみるんじゃないわよッ！」

怒り心頭の和歌の猛反撃は、事態についていけずに固まっている連中を秒殺していった。ぐるりと自分を取り囲んでいた五人の騎士を得意の空手で次々と地に沈めれば、一度動きを止める和歌。タイミングよく風が吹き抜け、その見事な黒髪を舞い上げた。

据わった目が、目の前に立つ髭騎士を睨み付ける。そのあまりの殺気に、相手は恐怖に喉を鳴らすも、和歌の怒りは収まらず。

「死んで詫びろ」

怒り心頭といった風情で喚いてくれた方が、まだマシだったかもしれない。低い声音で静かに紡がれた言葉は、恐怖以外の何ものでもなかった。

「おらぁ！」

気合の一声と共に繰り出された回し蹴りが、恐怖に固まっている相手の鳩尾に見事入った。比喩でもなんでもなく、背後に吹っ飛ぶ髭騎士。

宙を浮けば、もちろん重力に従って落下する甲冑の体。背中から倒れ込んだ相手の口から抜けていく魂が、確かに見えた気がした。

ここは何処？ー５ー

腕の前で交差させた腕を息を吐き出すと共にゆっくりと下げていき、突然響いた拍手に和歌の黒の瞳が動いた。

「いや、お見事」

雪山の氷山の如く冷めた瞳で和歌が見据える先で、腹黒大王は拍手を続けながら近付いてきた。

「末席とはいえリンベール王国近衛隊の隊長を一撃で昏倒させる相手など、そうそういないよ」

青年の愉快そうな言葉を黙って聞いている和歌の両の拳は握り締められ、長身が目の前に立つ。ふわりと鼻腔を掠めた花の香りに、しかし和歌の怒りが収まるはずもなく。それどころか、悪化の一途を辿るのみだ。

無言で、和歌の拳が青年の綺麗な顔目掛けて放たれる。ここで、綺麗な顔に傷をつけたら大変だとか、そういった常識的な配慮が配られるはずがない。

「っと！」

しかし、和歌の渾身の一撃は目の前の美青年に軽々と受け止められてしまった。手首を握ってくる指は思いのほかがっしりとしていて、和歌は悔しげに顔を歪める。

「おやおや。随分とじゃじゃ馬な姫だ。しかし、だからこそ面白い」

至近距離で愉快そうに微笑まれ、和歌の怒りのバロメーターの針は限界を超える。更にもう一発お見舞いしてやろうかと身構えた時、握られたままだった手を引かれ、突発的だった為に前のめりになった和歌の体を青年の腕が抱き締めた。

ここは何処？ー６ー

「な――――ッ！？」
突然の事に、怒りに赤々と燃えていた頭が今度は真っ白になる。
軽いパニックを引き起こしている和歌は口をパクパクと無意味に開閉し、逃れようと暴れるも長身を相手では無駄な足掻きだった。
「ここの女性達は皆おしとやかでね。少し物足りなかったんだ」
片腕で軽々と和歌の自由を奪い、青年の左手が綺麗な夜色の髪をもてあそぶ。
「こんなじゃじゃ馬も、たまにはいいかもしれない」
何が楽しいのか、愉快そうに笑う青年。
が、体の自由を奪われて好き勝手触られて失礼極まりない発言を連発されている和歌は、もちろん愉快であるはずがなかった。じゃじゃ馬じゃじゃ馬って、何回連呼すれば気が済むのよ！
一発どころか十発殴っても殴り足りないところだが、それが叶わないのならば仕方がない。
「放しなさい！仮にも公衆の面前で抱き締めるってどういう神経しているの！しかも、あたしとあんたは今会ったばっかりなのよ！？馴れ馴れしいにも程があるわ！」
実質的な暴力に訴えられないのなら、ここは言葉の暴力に走ろう。あまり得意じゃない国語の能力を最大限に活用して、力の及ぶ限り貶し尽くしてやる！

ここは何処？ー７ー

「あんたには恥じらいってものがないわけ！？普通、最初は初めましての挨拶から関係が始まるのが筋ってもんだわ！そんな事、幼稚園のガキでも知ってるわよ！あんたは、幼稚園児…いいえ、猿以下よ！」

開けば閉じる事を知らない口から矢継ぎ早に飛び出す罵詈雑言の数々に、奇妙な格好をした少女を腕に抱いている青年が少々面食らったような顔で見下ろしている事も、澄んだ空気によく通る声に道行く人々が何事かと立ち止り、小さな野次馬ができている事も、視界が青年の胸一杯の和歌が知るはずもなく。

「いいえ…動物の世界にも礼儀はあるのかもしれないわ。だとしたら、ナルシストのあんたと一緒にするのはあまりにも失礼かしら」

微かに驚いた様子だった青年の口元に、淡い微笑が広がっていく。面白そうに一人で喚き続ける和歌を見降ろし、しかし喧騒を縫って僅かに届いた音に鋭さを増した蒼の双眸が背後を一瞥した。

「ええ、そうよ！失礼よ、失礼極まりないわ！こんな失礼な事ってないわ！よって、すぐに謝りなさい！土下座して、許しを…ッ！？」

何だか自分勝手な理論を展開し出した和歌の罵倒は、強くも優しい指に顎を持ち上げられた事によって遮られる。目の前の蒼色の双眸が焦点を失えば、唇に温もりが触れた。

「・・・・・・・！？」

あまりの出来事に、和歌の思考は完全に停止する。背中に回されていた手は解かれ、それによって自由を取り戻した両手で相手を突き飛ばす事も出来たのに、和歌はただ、まるで労わるような優しい男の口付けを受け入れていた。

ここは何処？ー８ー

数秒か。唇が離されれば、力が抜けたように和歌はその場に座り込んでしまう。見下ろしてきたその深い色の双眸に止まっていた思考が動き出すと同時に、和歌の頬が火照ったように熱くなった。

「あ…あんた…ッ。一体、何をして…ッ！」

最大の怒りを睨み上げることでぶつけるも、和歌のファーストキスを奪った相手は何処吹く風で穏やかに笑っている。

「初めてにしてはなかなかに甘美な接吻だった」

腕を組み、そんな感想までご丁寧に述べてくれる。

「は…初めてですって！？何で、アンタにそんな事がわかんのよ！」

何だか論点がずれている反論だった気がするが、和歌の喚き声など聞こえていないかのように飄々とした様子の青年はひらりと手を振って背中を向けた。

「また会おう。――――『天羅の乙女（ルベリアス）』」

去っていく時まで優雅な美青年の意味ありげな呼びかけに疑問を持つ余裕など、今の和歌にはなかった。俯き、地面に付いた指が砂利を掻く。

「…不覚だったわ。まさか…まさか、こんな所でファーストキスを奪われるなんて…」

しかも、何かもの凄く軽そうな男に。泣く子も黙ると怖れられた全国高校空手大会準優勝の私が、いとも簡単に体の自由を奪われて。しかも、相手は片腕ときた。

こんな屈辱があるだろうか。あっていいのだろうか。いや、いいはずがない。

ここは何処？ー９ー

「・・・・・・・・・」

地面に力なく座り、俯いている和歌の姿は見ようによっては泣いているように受け取られたかもしれない。

人通りの多い露天商の一角に昏倒している甲冑姿の七人と、座り込む娘。どう考えても奇妙なこの光景に立ち止まる者は多かったが、やはり和歌の制服姿に恐れを抱いているのか声を掛けてくる相手はいなかった。

それが、とても賢い選択だという事を知らずに。

「…ふふ。ふふふふ」

不気味な笑い声が、ストレートの黒髪に隠された唇から洩れる。

「いいわよ。これは喧嘩を売られたと思っていいのよね？あたしは、喧嘩を売られたのよね…？」

地獄の底から響いてくるような声音で紡がれる問いかけに、応える者がいるはずもなく。

「売られた喧嘩は買うのが基本。このままやられっぱなしでは、全国大会準優勝の名が泣くわ」

暴走した思考は誰かの制止がない限り止らない。伏せていた顔が勢いよく上げられれば、その黒の双眸が良く晴れた青空を映した。

「覚えてなさい！次に会った時は、絶対にぶん殴ってやるんだから！」

立ち上がり、握り拳を突き上げた和歌は澄んだ青空に誓う。

エイエイオー！等と一人で気合を入れている彼女からは、自分が置かれている状況がどの様なものなのかという認識が完全に欠落していた。当然、近付いてくる兵隊の一団がまさか自分を標的にしているなどとは露にも思わない。

ここは何処？ー１０ー

しかし、直感だけは良かった。怒りが収まる代わりに燃やされていた闘志が影を潜めれば、和歌は我に返る。そして、砂利を踏む耳障りな足音とこちらに近付いてくる甲冑姿の集団を視界に入れた瞬間、本能が警鐘を鳴らした。

「逃げたほうがいい…よね？」

昔から友達に動物並みの本能だと散々言われてきた和歌である。今回も己の直感を信じて、くるりと向きを変えて走り出した。両脇に所狭しと露店の並んだ大通りを逃げながらちらりと背後を振り返れば、さっきまでは歩いていた甲冑集団が走り出した事がやはり標的は自分だったのだと和歌に再認識させる。

しかし、常日頃から鍛えられている和歌の走るスピードは思ったよりも速い。この鬼ごっこは、どう考えても、重い甲冑を着た鬼達よりも身軽な和歌の方が有利だった。

人通りの多い大通りを適当に曲がり、小道に入る。賑わいを見せていた通りとは違い住宅の密集した路地裏はまるで迷路の様に細い道が張り巡らされていて、少し走っただけで和歌は方向感覚を失った。

元々ここは見ず知らずの場所だ。方向が分かっても何処へ行けばいいのかなど見当もつかない。ならば、今は無駄な思考はせずにとにかく危険を回避する事に専念するべきだ、等という理路整然とした思考回路が和歌の中で築かれるはずもなく、ただ危険を察知する嗅覚の鋭さだけで直感的に最善の方法と少なくとも自分が思っている行動を和歌は取っていた。

ここは何処？ー１１ー

故に、体力の限界が訪れるまで走り続けること、何分が経ったのか。ふと届いた喧騒に、和歌は足を止めた。

その喧騒の発生源はどうやら自分がいる路地が突き当たる別の小道らしく、背後を振り返って鬼の影がない事を確かめた和歌は、様子を窺うように足音を忍ばせて歩き出した。冷たい白壁に背を預けて、角の向こうをそっと窺う。

「ふざけんなよ！ぶつかってきたのはお前達じゃないか！」

狭い路地裏に反響する程の大声で喚いているのは、まだ十歳前後の少年だ。喧嘩を吹っかけている相手は屈強な、明らかに柄の悪いと分かる数人の男達だった。

「…これって、いわゆる、いちゃもんってやつ？」

推測するに、ここまでの経緯はこうだ。

お母さんにお使いを頼まれた少年、仮に太郎君と名付けよう。太郎君（仮）は、家への帰り道の途中、柄の悪い男達が前から歩いてくることに気付いた。狭い路地裏。何とか交差しようと体を横にして進むも、その肩が男の一人の腕に当たった。それはどう考えても太郎君（仮）の所為ではないのだが、骨が折れただのといちゃもんをつけ始め、治療費を出せなどと迫っている最中、と。

「何処の世界にもいるんだなぁ、あーゆー馬鹿って」

嫌だ嫌だと首を振も、再び喧騒の様子をそっと窺い、どうもまずい状況になってきていることに、和歌は諦めたように溜め息をついた。

「お節介はあたしの十八番、だもんね」

こればっかりは、生まれもったものだから仕方がない。

ここは何処？ー１２ー

諦めもまた肝心。やる事が決まったなら行動に移すは早い。
足元に、まるで投げてくださいとでも言いたげに転がっている小石を拾い、狙いを定めて和歌は力の限り放り投げた。
空気を切って飛んでいった小石は、ものの見事に一人の男の後頭部を直撃する。どうやら都合よく鋭く尖った角が当たったらしく、血が噴き出す。効果音なら、ピューって感じ。
いや、あれは出過ぎでしょ。物理的に考えて、あんな小さな石の直撃であれだけの出血は有り得ない。
「あたしはどんだけ豪腕なんだっつーの」
掌に収まる程度の石で後頭部をかち割れたら、ずっと前にプロ野球選手にでもなってるって。
「ま、いいか」
細かい事は気にしない。だって、答えなんて出ないから。
「お～い！そこの太郎く～ん！早く逃げなさいよ～！」
思ってみもなかった背後からの攻撃と出血に驚いている男達を呆然と眺めている少年を勝手に付けた名前で呼び、逃げるように催促して和歌も来た道を引き返す。

ここは何処？ー１３ー

背後を振り返れば、案の定怒り狂った男達が追いかけてくる。
こういう結果になることなど最初から判りきっているのに、何でかなぁ。出さなくてもいい世話を焼く。
「ま…それがあたしだしね」
厄介な事に首を突っ込む。その度に降りかかる災難から身を護る為の護身術として空手も始めたのだし。空手の楽しさもこの厄介な性格がなければ一生知らなかったのかもしれないから、まあ、嫌な事ばかりじゃないかな。
要は、見方の問題。
この鬼ごっこに負ける気もぜんぜんしない。逃げ切ってみせる。
多分この下町で一番賑わっていると思われる、人通りの多い市場を小柄な体を生かしてすいすいとすり抜けていく。ちらりと後ろを振り返れば、思った通り、行き交う人波に行く手を阻まれてあたふたしているヤンキーの姿が垣間見えた。
「ふん！伊達にお節介は焼いてないわよ」
面倒事に首を突っ込んで、時折柄の悪いお兄さんとかおじさんとかに追いかけられたりするから、ただ逃げ切れば勝ちの鬼ごっこには自信があるのだ。まあ、それが誇れるかどうかは別として。

ここは何処？ー１４ー

露店に並ぶ果物をぶちまけて、流石のヤンキー君達もおばちゃんには勝てないみたい。完全に行く手を阻まれた鬼の様子を確認し、和歌は大通りから裏道へと姿を消した。

狭い路地裏を右へ左へと曲がり、目の前に現れた長い長い階段を上り終えた先で出会った景色に、足を止めた和歌は息を呑んだ。

「うわぁ…」

視界一杯に映る空の青と、陽の光を弾いて輝く白の建物が織り成す幻想風景に和歌は感嘆の声を上げた。

切れ切れの呼吸は、毎日の空手で培われた基礎体力のお陰かすぐに整う。石畳はやはり白く、ローファーの踵が踏む度に乾いた音を奏でた。

それがまるで音楽のように感じられて、和歌は思うままにステップを踏む。何処までも澄み渡った青空に舞い上がる、四分や八分音符。

ふと、紡がれていた音楽が掻き消える。残された余韻を吸い込むこの世界の青空が、自分を包み込んでいた空と同じ色だったから。

「…空を眺めて…ふと思いました」

自然と口をついた旋律は、小さい頃に聞いた歌。

「季節によって色が違うのです。

場所によって色が違うのです。

それなのに、この空は、何処までも繋がっているといいます。

ならば、この空を飛んでいったら、あなたに逢えるでしょうか。

青い青いこの空は、あなたと私の世界を繋いでくれる。

だから、逢いに行きましょう。

あなたの世界に続いている、この空を越えて」

多分、同じ色の空だったから。

理由は、それだけ。

「つッ――――…」

零れ落ちそうになった涙を堪えようと天を仰ぎ、その先で出会った歪な蒼が、更に和歌の心を揺さぶった。

ここは何処？ー１５ー

街全体を見渡せる小高い小さな広場を駆け抜けた風は、和歌の頬を撫でていく。それはまるで薄衣のように和歌を優しく包み込んだ。

泣くものか。泣き叫んでこの状況がどうにかなるというのなら話は別だけれど、夢でない事を、もう信じない訳にはいかない。

今時の女子高生と比べれば長い、けれど確実に校則に違反する短めのスカートが汚れる事も厭わずに、和歌は石畳に腰掛けた。柵も何もない高台の眼下は落ちたらただでは済まない高さであるが、空中に浮かぶ足をぶらぶらと揺らす和歌は、全く恐れていない様子だった。

「…ほんと、ここ、何処なんだろう」

まるで網の目のように張り巡らされた狭い路地に寄り添うように所狭しと建てられた家は、この前テレビで見たヨーロッパの田舎町を思い起こさせる。かなり距離があるのか、霞んで見える彼方には、深い森や沼地があり、地平線は海の色だ。

露台に干された洗濯物が風に乗って揺れる様や、高い家の壁に挟まれた細い路地を行き交う人々の様子は、確かにこの世界が生きているものである事を和歌に伝えてくれる。

目の前の光景は、きっと日常のもの。非日常なのは、自分の方。

「ここでこうしてても、何が変わるわけじゃないんだけどな…」

頬を撫でる風は心地よくて、見上げればまだ何処までも澄んだ青い空が広がっている。

こうしてここで座っていても、何かが変わるわけじゃない。ただ無為に過ぎていく時間の中で、異質としての自分を更に根深く認識させられるだけだ。

ここは何処？ー１６ー

そうと分かっていながら、それでも和歌は動けなかった。何かをしなければならない事は確かだけれど、その肝心の何をしたらいいのかが分からない。

完全に、お手上げ状態だ。白旗でも振りたい気分。

ふと脳裏をよぎった思いに苦笑を浮かべた和歌は、背後から階段を登ってくる荒々しい足音に気付いた。立ち上がり、振り返ればその視界にまいたと思っていた先程の男達の姿が映り込む。

「しつこい男は嫌われるのよ…！」

嫌悪感丸出しの捨て台詞を残して、和歌はそれなりの勾配がある坂を上手くバランスを取りながら駆け抜けた。背後から、「待ちやがれ～！」なんていうお決まりの文句が聞こえたけれど、馬鹿者共。誰が待つか。

「わッ！？」

太陽の光を弾く白い坂を駆け下り、路地よりも少しは幅広の道を行き交う地元人達の好奇の視線を浴びならが走っていた和歌は、急に横から手首を掴まれて細い路地の一本に引きずり込まれた。

「ちょ…！何す…」

何するの！と出かかった文句は、口に当てられた人差し指に遮られてしまう。

「こっち」

自分よりも背の低い少年に手を引かれて、和歌は入り組んだ路地を走った。視界の端を流れていく家々はやはり白一色で、無駄なく配置された家々の隙間から差し込む太陽の光をありがた迷惑な程に反射してくれていた。

アスファルトの地面に慣れた現代っ子の身には、正直言って少し目がチカチカする。下手したら、視力落ちるよ、これ。

ここは何処？ー１７ー

十字路だけでは飽き足らず、六つや八つに分かれている細い道を目の前の少年に手を引かれる形で走っていた和歌の息も、流石に切れてきた。どんなに空手で鍛えた持久力があるからといって、これだけ長い時間走り続けていたら疲れてくる。もともと長距離ランナーじゃないし、だいだい、全力疾走の持久走なんて聞いたことない。こんなペースで何十キロも走ったら、それこそ自殺行為だわ。

何の拷問よ、これ。

もう限界、と思ったら、なんていいタイミング。前を走っていた少年が立ち止まった。和歌を導いていた手がほどかれ、膝に両手をついて乱れた呼吸を整える。爆走する心臓の音が耳にうるさかった。

「あ…りがとう、少年。助かった」

休憩を挟みながらも疾走を強いられた両足の筋肉の上げる悲鳴には素直に応じて、石畳の地面に座りこんだ和歌は未だ乱れた呼吸の合間を縫って感謝の言葉を投げ掛ける。

「ううん。寧ろ、お礼を言わなければならないのは俺の方。助けてくれて有難う、親切なお姉さん」

笑顔が眩しい。

そう思った。これは、完全に美形の部類に入る。もしこんな綺麗で素直な男子がクラスにいたら、確実に醜い争奪戦が繰り広げられるはずだ。

「ちなみに、俺の名前はタロじゃないよ。ガーネだ」

しかも純真。

完璧だ。この子、天使。

ここは何処？ー１８ー

「どうしたの？お姉さん」
片手で口元を覆い、片手で少年から発される眩しい光から目を庇い、顔を背けた和歌は感極まって言葉が出てこない。訝しげに再度声を掛けてくる相手に、何でもないと返すのが精一杯だった。
お節介は十八番。日本ではありふれた名前で呼んだだけなのに、ちょっと間違ってるけどちゃんと覚えていて、自己紹介までしてくれる。
感激。こんなに素直な子、弟に欲しい。
「…ひょっとして、怖かった？」
後ろから覗き込むようにして見上げてきたガーネの青い瞳に見つめられ、また感激の涙が溢れてきた。それを隠そうと少年に背を向けるという行為が、更に彼の心配を増幅させる結果になるのだけれど。
だって、仕方ないじゃない。こんなに純真な子、今時いないよ？自分だって危険な目に遭ったのに、それなのに、こんなへんてこりんな格好をした女の子を心配してくれるなんて。
（泣けるわ…）
涙が止まらない。もちろん、感激の涙だ。

ここは何処？ー１９ー

「あの…お姉さん。本当に、大丈夫？」
泣き止まない和歌に対して困惑に動揺を付け加えた様子のガーネの手がそっと背に触れる。
完全に戸惑っている心優しい少年に流石にこのまま感涙している場合ではないと判断した和歌は、ようやく涙を拭った。
あたしも、涙もろくなったものだわ。
「大丈夫だよ、ガーネ君。ちょっと…緊張の糸が切れただけなの」
心配そうに見上げてくる青空の瞳に笑って見せる。事実、ここが何処かもわからない中で、知り合いとまではいかないまでも自分に味方してくれる誰かを得た今、安堵しているのだ。
「ところで、少年。一つ、訊いてもいいかな」
「うん、いいよ。何？お姉さん」
助けてもらったお礼をしたいと少年の家に招かれる事になった和歌は、その道中前を歩く背中に最初から抱いていた疑問をぶつけてみた。
「ここって、何処？」

記憶喪失的情報収集ー１ー

「・・・・・・・は？」

歩くのを止めて振り返った少年にしたがってこちらも立ち止った和歌は、意味がわからないという顔をする彼に苦笑した。

まぁ、彼の反応は当然だろう。もしここが日本で、少年の位置に自分がいたら、同じ反応を返していたはずだ。

「何処って…リンベール王国の都、偉大なる王様が治めるリーザだよ」

リンベール王国。

そんな国、地球上にあっただろうか。

地理は得意と豪語するだけあって、日本地図だけでなく世界地図もそれなりに頭に入っている。が、地球上に存在する国全てを記憶するには至っていないのが現状だ。ちょっとそれが悔しかったりするんだけど。

それでも、今持てる知識を総動員してリンベール王国という国を世界地図の中に見つけてみよう。

チクタク、チクタク。

秒針が時を刻む音。もちろん幻聴、というか沈黙が続く場を持たせる効果音だ。大人の事情。

「・・・・・・・何処よ、それ」

結論、そんな国は世界地図には見つかりませんでした。

記憶喪失的情報収集ー２ー

難しい顔をして考え込む和歌を、困惑よりも不審を深くした少年は見つめる。

必然的に、再び沈黙が落ちる世界。民家が密集する狭い路地裏は静かで、駆け抜ける風は細い道を駆け抜けていく。

「…お姉さん、ひょっとして、記憶喪失？」

己の中で不審と疑惑の天秤を掲げていた少年の辿り着いた結論は、当然といえば当然のものだったのかもしれない。

見慣れない服装。

珍しい髪と瞳の色。

認識のない国名。

これだけで、異世界から来たのだ！なんて考える方が、頭が大丈夫かと言われる危険性の孕む思考だ。

記憶喪失なのだと、理論的思考が導き出す最適な結論だった。

「あ――…うん。そうみたい」

などと、顔を上げた和歌が深く考えるはずもない。ただ、自分でもどうしてこんな所に来たのかわからないし、そもそも日本の事について話すのが面倒だったのだ。

だから、少年の確認は和歌にとっては救いの手だった。

「そっか…。それは、心細いよね。お姉さん、名前くらい覚えてる？」

和歌の自分勝手な理由でついた嘘を信じきった少年に良心がちくりと痛んだものの、仕方のないのだと片付ける。

たとえここで時間を割いて話しても、信じてもらえるはずがないのだから。

記憶喪失的情報収集ー3ー

「名前…うん、覚えてるよ。そういえば、まだ名乗ってなかったんだっけ」

なんたる失態。

礼に始まって礼に終わる。それが、武道の教えだ。

仮にも全日本空手大会で二位の私が、こんな基本的な礼を欠くなどと。

「あたし、北原和歌。よろしくね、ガーネ君」

自分の失態に対する怒りにふるふると数秒震えていた和歌は、怪訝そうな少年の視線に気付いてにこりと笑った。手を差し出して、けれど困ったような顔に首を傾げる。

数秒、純真な青の瞳を見つめる。こんなに至近距離でまっすぐ見つめられる事なんてここ数年なかったので、場違いだと思ったけれど頬が熱くなるのは意識ではどうにもならない。

「…あぁ、そっか」

握られない手の原因にようやく思い至って、ぽん！と手を打つ。そうしてもう一度、右手を差し出した。といっても、今度はちゃんとした解説付きで。

「右手を握り合うの。握手って言うんだけど、あたしの国の挨拶の仕方」

華の咲くような笑顔を浮かべて手を差し出し続ければ、やがて戸惑いながらも少年は和歌の右手を握り返してくれた。

記憶喪失的情報収集ー４ー

こうする事でまたちょっと異邦人である自分と彼との距離が縮まった気がして、嬉しくなった和歌は握ったままの右手を上下に振った。習慣にない行動に少年は目を白黒させながらも、浮かべたままの笑顔が功を奏しているのか、されるままに振り回されている。

「え…と、お姉さん…じゃなかった、アカ…さん」

「和歌」

言いかけた少年を遮り、和歌は顔を近付けて間違いを正す。

少年はその分、顔をのけ反らせた。

「えと…ハ…ハカ…さん？」

「和歌」

「マ…カさん？」

「・・・・・・・・・・」

言語上の問題だろうか。

どうしてもわ行が発音出来ない様子の少年に、ついに和歌が折れた。微苦笑を唇に浮かべ、くの字に曲げていた体を起こす。

「うん、わかった。カズでいいよ」

「カズ…さん？」

「そ。親しい友達は皆そう呼ぶ」

小学校の時、同じクラスに同じ名前の友達がいた。その子と区別する為に付けられたあだ名だったけれど、いつの間にかその呼び名が定着していた。

それは、友達に呼ばれれば特別な証。

「わかった。じゃあ、カズさん」
「うん」
「手、離してもらえるかな…？」
「え？あ…ごめん」
まだ握手したままだった事をすっかり忘れていた。笑いながら謝罪する和歌だったけれど、目の前の少年は頬を朱に染めて俯く。
そんな彼の様子に気付いた和歌は、くの字に体を曲げて彼の顔を覗きこんだ。
「どうしたの？」
「・・・・・・・・ッ！」
息を呑んでのけ反った少年の顔が瞬く間のうちに熟れた林檎のように真っ赤になる。更に彼は和歌から数歩後ずさって、肩で息をしていた。
そんなガーネの様子に、和歌の困惑は増すばかりだ。空いた距離を数歩で縮めて、膝を折った和歌は少年と目線を同じにした。
「風邪かな？」
ガーネの額に掛かる柔らかな金髪を退け、額に手を当てる。その瞬間身体を強張らせた彼には気付かずに、空いたもう一方の手を己のそれに当てた和歌は、上目遣いに空を見上げて唸った。
「う～ん…熱はなさそうだけど」
目の前で固まっているガーネへと視線を戻した和歌は、額に当てていた手でその綺麗な金髪を撫でた。
「そっか。うん、大丈夫だよ、少年。今度誰かに絡まれるような事があっても、このあたしがやっつけてやるから」
「え…？あ…」
「だから、怖がらなくたっていいよ」
にこり、と笑って、和歌は立ち上がる。

記憶喪失的情報収集ー６ー

何か言いたそうに口を開きかけたガーネは、結局吐息と共に口を閉ざして帰路への道を再び歩き始めた。その横を、物珍しそうに白い壁の続く路地裏を見渡している和歌が歩を進める。

そんな彼女がなんだか危なっかしく見えて、最初に抱いていた不信感や警戒心も忘れて、ガーネは無防備なその白い手を取ろうと半ば無意識のうちに己のそれを伸ばしていた。しかし、触れるか触れないかという所で和歌が顔を向けてきて、向けられた笑顔に大慌てで手を戻した。

「なんだ、少年。そんなに心細かったのか」

自分の行動と高鳴る鼓動の理由が分からずに、ただ浮かんでくる羞恥心に顔を伏せていたガーネに、頭上から和歌の声が降ってくる。顔を上げると同時に温もりが手を包み込んできて、息を詰めた。

「え…？あの…カズさん…」

困惑して思うように言葉が出てこないガーネに、手を繋いだ和歌は太陽のような笑顔を向けた。

「こうして手を繋いでいるとさ、傍にいるんだなって安心しない？」

小首を傾げて同意を求めるように笑うと、少年はまた顔を伏せてしまった。けれどそれは決して拒絶ではない事を、ぎこちないながらも握り返してきた小さな手が教えてくれる。

なんだか弟ができみたいだ。

嬉しくなって、和歌は鼻歌まじりに白い風景を歩いた。

記憶喪失的情報収集ー7ー

ここが何処なのか、とか。どうしていきなりこんな所にいるのか、とか。

わからない事だらけで、心細い思いをしないといえば嘘だけれど。それでも、握り返してきてくれた手の温もりだけは確かで。だから、少しだけ、大丈夫なような気がした。

「うん、何とかなる」

高い建物の狭間から見上げた青空はとても美しかった。

己に言い聞かせるように呟きを洩らせば、少年の訝るような呼びかけが掛かる。視線を傍らに落して何でもないと首を横に振れば、怪訝そうにしながらもそれ以上尋ねてくる事はなかった。

不意に、少年の手が離れる。隣から走り出して、その先を追った和歌は、少し離れた家の玄関から出てくる女性の姿を見つけた。

「母さん！」

駆け寄った少年の呼びかけに振り返った女性の金髪が流れ、太陽に弾いて輝く様はとても綺麗だと思った。

「ガーネ」

抱きついてきた息子に瞠る目は空の色で、恰幅のいい体でガーネを受け止めた彼女は腰を折って目線を同じにした。

「お帰り、ガーネ。遅かったね。何かあったのかい？」

「うん、ごめん。ちょっと、絡まれて」

「ごろつき共にかい？あれ程気を付けろと言ったじゃないか」

「ごめんなさい。でも、あのお姉さんが助けてくれたんだ」

母子の微笑ましい遣り取りを眺めていた和歌は、二対の青色の瞳を向けられて、無意識のうちに背筋を伸ばしていた。

「おやおや…」

和歌の奇怪な姿を頭からつま先までゆっくりと眺めた女性は、ガーネを引きはがして近付いてきた。

記憶喪失的情報収集ー8ー

元より体格のいい女性は、発する気配も威圧感がある。柄の悪い男達に平然と喧嘩を売る和歌も、子供を守る母親の強さの前では蛇に睨まれた蛙みたいに硬直した。

家族を守るお母さん達は、世界で一番のつわものだと思います。

「ふぅん…？」

「あ…あの…」

目の前で立ち止り、触れるくらいに顔を近付けてくる彼女に、和歌は引き攣った愛想笑いを浮かべるしかない。

特に悪い事をしたつもりはないのに。嘘をついた時、お母さんのじっと見つめる瞳を思い出してしまった。

「あんた、今、ちょっとした有名人だよ？あのブルイ隊長を、一撃で沈めたんだってねぇ」

楽しげに笑う女性が指している人物を思い出すのに、和歌は数十秒を要した。

「…あぁ、あの、馬鹿髭騎士さん？」

ネーミングセンスを疑われそうなそのまんまのあだ名を付けられたブルイ隊長は、きっと今頃くしゃみをしているに違いない。

和歌のあまりにも正直な言いように固まっていた女性は、やがて愉快そうに大声で笑った。

「あっはははは！こりゃあいい。恐怖のブルイ隊長になんとも素直なあだ名を付けるとはねぇ」

働き者の大きな手が和歌の髪を無遠慮に撫でてくる。

それがまるで愛玩動物にするようなものに思えて、なんとも複雑な気分。確かにこの世界ではとっても珍しい部類に入るだろうけれど、人間としてすら扱ってもらえないのかって話だ。

「気に入った。息子を助けてくれた恩もある。それを仇で返す程、腐っちゃいないよ」

頭を撫でた後は強い力で背中を叩いてきてくれて、これはこの人なりの好意の示し方なのだと思うようにした。

そう思わないと、なんだか虚しくなってくる。

記憶喪失的情報収集ー９ー

「さあ、入りな。えぇと…あんた、名前は？」
「和…カズです」
室内に案内されながらの誰何に思わず本名を名乗りそうになった和歌は、慌てて言い直した。
そうだった。この国の人達の発音にワ行はなかったんだ。
「まるで男の子みたいな名前だねぇ」
この人は、遠慮っていう言葉を知らないのだろうか。自分に正直なのはとっても素晴らしい事だけれど、せめてそこに、ほんのひと匙程度でいいので、思いやりという心を混ぜてほしいと思うのは、これって我儘？
「とりあえず座りな、カズ。すぐに昼食にするからね」
「…え？」
土足のまま上がり込んだ居間のテーブルの前に自然と座っちゃったけど、ちょっと待て。
いいのか？それで。だって、どう考えても不審人物でしかないでしょう。髪と瞳は黒いし。なんだかピラピラした服着てるし。肌の色は黄色人種だから白人系に比べればちょっと色が違うくらいだから、日焼けしました、っていう言い訳がまだ通用しなくもないけど。どう考えても、膝辺りまで生足を露出しているこの格好は奇異に映るだろう。
ここの人達の格好は、あえて喩えるなら、インドのサリーに似ている。だから、腕は露出しても、下半身は足首まで布で覆っているのだ。
要するに、頭のてっぺんからつま先まで眺め回して、不審人物じゃないという証拠はないって事。言い換えれば、何処からどう見ても、不審人物以外にありえないって事。
それを、こうもあっさりと家に通していいのか？その上、昼ご飯

までご馳走するなんて。
いや、うん。有難いんだけど。とっても有難いんだけどね？
いくら息子の恩人だからといって、ちょっと警戒心なさすぎなんじゃ…？
「…って、なんであたしがそんな事を考えなくちゃいけないのよ」
椅子に座って思考に沈んでいた和歌は、自分のお節介加減に嫌気が差してその事に関する思索を放棄した。

記憶喪失的情報収集ー１０ー

一人残された居間を、改めて眺めてみる。
広さは多分八畳くらい。紫色の薄い布が掛けられた入口の先にはさっき入ってきた玄関があり、南側に備え付けられた窓からは柔らかな日差しが入ってくる。目の前のテーブルは石造りで、白っぽく見える石は、多分、御影石。
南側には窓以外に扉があり、中庭へと続いている。立ち上がり、窓の外を見ると、向かい合う四つの家が四角い中庭を造っていて、そこは共同の炊事場になっているみたいだった。丁度昼時という事もあって、年齢の違う数人の女性が談笑しながら手際よく調理しているのが見えた。
「あれ…？」
そういえば、あの純真な少年は何処に行ったのだろう。てっきり、母親と一緒に中庭へ出て行ったのかと思ったのに。
答えなんて出ないのに悩み続けていると、背後で扉が閉まる音がしたので驚いた。振り返ると、片腕に収まるくらいの籠を手にして居間に入ってくるガーネの姿を見つけた。
「あ、カズさん。鶏肉平気だった？」
「え？あ、うん」
「よかった。もう少し待っていて。今からメインディッシュ作るから」
「あ、うん」
にこりと笑って中庭へと出ていく少年を見送った和歌は、彼が自分の前を通り過ぎる時に聞こえた音に目を丸くした。
ちょっと待て。今、コケコッコーって鳴かなかったか？
え？じゃあ、あの籠の中身って、生きたニワトリ？
「・・・・・・・・・・・・うそー…」

記憶喪失的情報収集ー１１ー

パタン、と閉まる扉を凝視した。中庭の賑わいが一層増したけど、その原因については敢えて考えないことにしよう。うん、そうした方が絶対いい。

和歌は、大人しく椅子に座って昼食ができるのを待つことにした。冷たい御影石のテーブルに頬を預けて見える視界に、今まで意識に留まらなかったモザイク画が映る。

「なんだろ…。ランプを持った女性、かな」

落ち着いた色彩を基調とした小さなモザイク画が描くのは、右手に持ったランプを掲げて立つ横顔の女性の姿だ。髪の色は、この世界の人達が纏う金よりも、どちらかというと和歌の色に近い。けれどそこは巧妙にぼかされていて、このモザイク画を描いた人が表現したかった色が何であるのかわからなかった。

「…宗教画、かな？救世主とか、天使とか。そんなところ？」

思考しているはずなのに、頭が回らなくなる。美しいモザイク画が映っている視界がぼやけて、重い瞼が落ちてくる。

あぁ、眠るんだ。

そう思ったのが最後、和歌の意識は夢の海へと沈んでいった。

＊

記憶喪失的情報収集ー１２ー

これは夢だ、と唐突に悟った。
瞼を閉じているのに、周りの景色が見える。
まるで揺り籠の中にいるかのように、ここは暖かくて、とても居心地がいい。
それもそうだろう。寝転んでいるベッドは最高級のマットのように柔らかく、染み込んでくる寒さから身を守る毛布は羽毛なのかとても軽くて肌触りがいい。
天街付きベッドの置かれた部屋はまるで高級ホテルのように広くて、青色を基調とした家具で纏められた室内は心を落ち着かせる効果があるのだろう。飾られている薔薇の華も、主張し過ぎず委縮し過ぎず、景色に溶け込むように静かにその存在を主張していた。
ここは何処だろう。
当たり前の疑問を何処か他人事のように、頭の片隅で考えていた。そんな事よりも、今はこの心地よい眠りを優先させたい。
不意に、誰かに呼ばれた気がした。
けれど、重い瞼は、まるで硬く閉じた貝のように開いてはくれない。
また、声がした。低くて、柔らかくて、けれどその奥に白刃の如き鋭さを秘めた不思議な声が、誰かを呼んでいた。
全身の神経が動いた部屋の空気を伝えてくる。仄かに明るかった視界に影が差して、向けた背中に誰かの鼓動と吐息と体温を感じる。
「――待っていたぞ、『天羅の乙女（ルベリアス）』」
耳元で囁かれた名詞に聞き覚えがある。
何処で聞いたのだろう。髪を撫でてくる優しい手は、誰のもの？
思考が纏まらない。浮かび上がる疑問は言葉を構成する文字として拡散し、その一文字一文字が夢の海へと溶けて消えていってしまう。

もう一度耳元で囁かれたその名称に、意識とは切り離された唇が応える。

「――…」

聞こえない。

愛しげに、切なげに。

囁かれた誰かの声に、どんな応えを返したのだろう。

＊

記憶喪失的情報収集ー１３ー

名前を呼ばれた気がした。
瞼は貝じゃない。若干重い気もするけれど、ゆっくりと上がっていってくれた。
また名前を呼ばれる。聞き慣れた、それは友達の証。
「う…ん…。ハル…？」
眠い目を擦り、まだぼやけている視界に覗きこむようにして見てくる影がある。
そうだ。授業中に眠ってしまったんだ。もう授業も終わって、呆れながらも起こしてくれる友人がいる。
あれ、でも、変だな。目の前に空が広がっている。
ハルの瞳は、青じゃない。
「カズさん？」
もう一度名前を呼ばれて、まるで霞かかっているようだった和歌の視界がはっきりした。唐突に現実と意識が繋がり、隣に立つ少年の青い瞳を凝視する。
「あ…あれ？あたし…」
「ひょっとして、寝ぼけてます？昼食の準備ができたから知らせようと思って入ったら、カズさん、寝ちゃってるから。起こすの躊躇ったんですけど」
華の咲くような、とは、きっと彼の浮かべる笑顔を指す時に使う表現方法なのだろう。
「昼食、すぐに運んでくるので。母さんの料理、美味いですよ」
笑顔のまま、彼はもう一度中庭へと続くドアの向こう側へと消えてしまった。
網膜に残った純粋な笑顔に、和歌は現実を思い出す。長い吐息を吐き出し、椅子の背もたれに深く沈みこんだ。
そうだ。

ここは、学校の教室じゃない。日本でもない。
友達もいない。家族もいない。
求めた日常は、ここにはない。

記憶喪失的情報収集ー１４ー

「あ――…」

寝ぼけていたとはいえ、夢と現の狭間に親しい友人の姿を求めた己の女々しさに、和歌は恥ずかしさと苛立ちを紛らわすかのように髪をかき上げた。

我ながら呆れてしまう。

今自分がいるこの世界が、夢じゃないんだって。現実なんだって、そんなの、とっくに諦めていたじゃない。認めて、それでも、泣いたって、願ったってどうにもならないから、こうして今を頑張っている。

それなのに。

意識が剥がれ落ちて、理性が消えて、残った本能はまだ、失ってしまった世界（もの）を求めている。

「ばっかみたい」

失ってしまったものは取り戻せないと。

どうしようもないと。

だから、前に進めと。

「あたしがそう、自分に言い聞かせてるっていうの？」

それはもう、否定しない。だって、見せられてしまったから。

意識で覆い隠していた無意識に。

理性で抑え込んでいた本能に。

意思で誤魔化していた願望に。

「それでも。誤魔化して、嘘ついて、欺いてでも、進むしかないじゃないの」

これが、物語の中の女の子だったら、きっと、泣きながら待っていれば、白馬に乗った王子様が助けに駆け付けてくれるのだろう。そうして、優しい手で抱き寄せられて。その胸の中で、眠るのだ。世界は、己の意思とは関係なしに、動き、そして、導いてくれる。

けれど、自分は違う。
泣き叫んでも、助けに来る蹄の音はない。
呆けて待っていても、差し出される優しい手はない。
自分の足で立ち、歩き、そして、見つけ出さなければならない。
どうして、と。そう問う事に意味はない。どんなに考えても、答えなど出てこない。
ならば、探し出す。
ここから帰る、その方法を。
その為には、何をしなければならない？

記憶喪失的情報収集ー１５ー

「…よし。取り敢えず、腹ごしらえ」
人が真剣に考えていれば、呑気にも胃が空腹を訴えてくれる。
そういえば、眠っていた授業は四時限目で、自分の時間感覚を信じるのなら、そろそろお昼休みの時間のはずだ。
楽しみなお弁当の前に男七人を相手にして、その上市内鬼ごっこなんてやらかしたら、それはお腹も空くというもの。
どんな切迫した時だって、体は正直だ。
「笑っちゃう。でも、うん、まぁ…それもいいかもね」
そういえば、空手の決勝戦を午後に控えた昼休み、お腹が鳴って友達に、「緊張感ゼロだね」って笑われたっけ。
だから、それでいい。
ここが、本当にいるべき場所じゃなくても、生きている事に変わりはないから。
「あ、少年。あたしも手伝うよ」
とりあえず、ただ座って食事が出てくるのを待っているのは性に合わない。丁度、こっちの間隔でいうサラダを運んできたガーネに、和歌は立ち上がりながら声をかけた。
が、何故か笑顔のまま首を横に振られる。
「え、でも…」
「カズさんはお客さんだから。お客さんに手伝ってもらったら、母さんに叱られる」
だから、俺の為にそこに座っていて。
唇に人差し指を当ててそう言われてしまえれば、それ以上何も言えなくなって和歌は仕方なく椅子に座り直した。

記憶喪失的情報収集ー１６ー

そんな和歌に、にこり、と非の打ちどころのない笑みを残してまた少年は中庭へと出ていく。
何だろう。向けられた笑みは凄い綺麗だったし、手伝いを断った理由も納得出来る。だけど、何故だろう。その奥に何かが潜んでいる気がする。
両手に木材の皿を持ちながら器用にドアを開けたり閉めたりしているガーネの細やかな働きによって、御影石のテーブルの上は瞬く間のうちに手作りの料理で一杯になった。美味しそうな匂いが混ざりあり、それがまた更に美味しそうに思えて、素直なお腹が歓喜の声を上げた。
「…げんきんな腹め」
ぐぅ、とそれなりの大きさで鳴った腹を両手で押さえながら、ガーネがまだ外にいてくれてよかったと思う。流石に恥ずかしい。
「さぁて、待たせたね、カズ。お腹空いただろう？」
背後から声がかけられると同時に、結構強い力で背中を叩かれた。それが思いの外痛くて、笑顔が引き攣るのはあたしのせいじゃない。
母親の後に続いて少年も椅子に座る。
自分が座っているのは、日本でいうと所謂上座で、向かい合って座る親子を左右に見る形になった。その二人が両手を顔の前で組んで目を閉じたので、合掌しようとしていた和歌は慌てて彼等に倣った。
「アメシュ。あなたの命により生を受ける事に感謝します」
母親の祈りの言葉に引き続き、親子の声が重なる。
「イシューメ」

記憶喪失的情報収集ー17ー

どうやら、食事前の祈りはこれで終わりらしい。
組んでいた手を解き、木製のスプーンにしか見えない道具を持つ二人を見て、和歌もスプーンを扱う要領で湯気の立つスープを木製の道具で掬った。
一口。
「…うん、美味しい！」
口の中に広がる味。シチューに似ているかな。
一度食べ物を口にするともう止まらなくなって、さっきまで抱いていた悩みは一旦地平線の彼方に放り投げておいて、テーブルに並べられた料理に夢中になった。
暖かい、シチューに似たスープが体の中に染み渡っていくのがわかる。心まで温かくなっていくようで、危うく泣きそうになった。
知らなかった。手料理って、こんなにも、暖かくて、優しかったんだ。
「よかった。口に合ったみたいだね」
黙々と食べていた和歌は、安堵したような声に二人の存在を思い出した。鶏肉のトマトソース煮、だと思う、料理にフォークを伸ばそうとした手を中途半端に止めた。
「あ…すみません。お礼もろくに言っていなかったです」
二度目の失態。
これでも全日本空手大会準優勝した身か。
「ありがとうございます」

記憶喪失的情報収集ー１８ー

フォークをテーブルに置いて、深くお辞儀する。そうすると何だか楽しそうな笑い声が聞こえたので、不思議に思って顔を上げると、ガーネの母親は嬉しそうな笑顔を浮かべていた。

「いやね、あたしにも娘がいれば、あんたみたいな感じだったのかな、って思っただけさ」

その微笑が、どうしてだろう。少しだけ、淋しそうに見えたから。けれど、ここから先に踏み込む事は許されないと思った。だから、もう一度お礼を言って、食事に戻る。

だって、こんなに美味しいご飯、冷めちゃったらもったいない。

「そういえば、カズ。あんた、記憶喪失なんだってね？」

「え…？あ、はい。そうでした」

そういえばそういう話になっていたのだと、食後のお茶を飲みながら思い出した。ちなみにこのお茶、味がジャスミン茶に似ている。

なんでもかんでも身近なものに喩えて説明するのは許してほしいな。これはこんな味がする、なんていちいち解説出来る程、ボキャブラリーも豊富じゃないし、舌も肥えていない。

だいたい、これはこんな味でどこがどう美味しい、なんて詳細に説明出来たら、あたしは今頃グルメレポーターにでもなっているって。

「覚えているのは自分の名前だけ。何処から来たのか、どうしてここにいるのかもわからないって話だったけど…。それ程落ち込んでいるみたいでもないみたいだね？」

不思議そうに見てくる親子二人の視線に、和歌は曖昧に笑うしか方法がなかった。

だって、本物の記憶喪失じゃないし。何処から来たのかなんて聞かれれば、日本からですって普通に答えられる。まぁ、その日本っていう国がこの場所で認知されるかどうかはまた別の問題になるの

だけれど。どうしてという問いには、むしろこっちの方が聞きたい心境だ。

記憶喪失的情報収集ー１９ー

「まぁ、心細いっていうのはありますけど…でも、ほら、悩んでいても始まらないですし。どうしてこんな所にいるのか、とか。答えの出ない疑問を繰り返して袋小路に入り込んで動けなくなるよりは、取り敢えず何も考えずに行動した方がいいかな、なんて」

我ながら、楽観的な性格だと思う。これがもう少し神経が細かい人だと、もっと慎重に、もっと合理的に行動するのだろう。

けれど、これがあたしだ。

悩むよりはまず行動。

思考放棄はしないけど、情報が集まっていない今、答えの出ない疑問を考えるなんて馬鹿みたい。わからなければ、聞けばいいんだ。

「改めて、お聞きしますけど。ここって、何処なんですか？」

手に持っていた木で出来た湯のみにしか見えないコップをテーブルに置き、背筋を正した和歌は一番の疑問を口にした。

顔を見合わせた二人は、事情を知っているという事もあり、一度頷くと腰を据えて話してくれる気になったようだった。

「いいかい、カズ。ここは、リンベール王国を治めるフィルチチェ二世様の住まう王都、リーザだ」

えぇと、ごめんなさい。とっても丁寧に説明し始めてくれた所悪いのですが、それはもう聞きました。

あたしが聞きたいのは、そこから更に下層の部分からです。

「あの…リンベール王国って…何処ですか？」

危うく、何ですかって訊きそうになった。

何ですかって、国です、としか答えられないよね。だから、この世界の大まかな地理を知っておいて損はないと思ったんだけど。

記憶喪失的情報収集ー２０ー

また顔を見合わせる、心根の優しい親子。
うん、まぁ、そうだよねぇ。当然の反応だよねぇ。まさか、そこまで記憶喪失が深刻だなんて、思ってないよねぇ。
心からの同情を籠めた眼差しがただただ申し訳ない。
「わかった。ガーネ、地図を描いておやり」
「はい」
あぁ、やっぱりこの少年、天使だわ。
また感動の涙を流しそうになった和歌は、目にゴミが入った振りをして慌ててまなじりに浮かんだ雫を拭った。
一人で忙しくしている和歌の前で、羊皮紙に似ている分厚くて黄土色の紙が広げられる。エンピツはエンピツみたいで、少年が慣れた手つきで絵、改め大陸を描いていく。
「いいかい？カズ。中央のこの大きな国が、今あんたやあたし達がいるリンベール王国。その王都リーザが、ここだ」
海に面した場所を母親が指差せば、それに従ってガーネが×印を書いて地名を書きこんでくれる。
そういえば、高台から眺めた地平線は海の色だった。
「リーザは交通の要所であるナッハバ港を有する海洋都市でね。国内だけじゃなく、周辺諸国からも人が流れ込んでくる」
少年の地図を描く手は止まらない。美術の成績が中学時代から２以上を貰ったことのない和歌にとって、流れるように世界地図を完成させていくその手は、まさに神の手に見えた。

記憶喪失的情報収集ー２１ー

ちょっと身を乗り出してほぼ完成の世界地図を見ていた和歌の目に、耳で覚えた二つの単語が飛び込んできた。
「あ…だから、あの髭騎士さん達は、あたしを見て、アゾマ国とかアザナ帝国の人だって思ったのね」
人の出入りが激しい港街でなら、そういった外国の人がいてもおかしくない。
事実、地図上で見ると、リンベール王国から山脈を挟んだ最北の国がアザナ帝国、対するアゾマ国は隣接する三つの国のうちの一つだった。
「おやおや、あの無粋な集団は、可愛いお譲ちゃんを指してそんな失礼な事を言ったのかい？これだから、武人は嫌いなんだよ」
彼女が嫌悪感を覗かせる理由が、和歌にはわからない。
首を傾げていると、何でもないと綺麗な笑顔で言い切られてしまった。そうされるともう、踏み込めなくなる。
空気は読む人なのよ、あたしは。え？これって、もう古い？
あたしに流行を求めても意味がないわよ。このスカートの丈を見ればわかるでしょ。
「とりあえず、リンベール王国が何処にあるのかはわかったね？この地図あげるから、記憶を取り戻す手掛かりにでもしな」
自分が何処から来たのか、大雑把ながらも正確な国の位置を記した紙を眺めたら思い出すかもしれない。
けれど、哀しいかな。どんなに眺めても、あたしがいた日本という文字は何処にもない。
わかっていた事だけれど、少しくらい気分が沈むのは許容範囲でしょ。赤ちゃんみたいに、泣き喚くわけじゃないんだから。
「それで、あの…その…」
あれ？王様の名前って、なんだっけ？

「…王様っていうのは、どんな人なんですか？」
結局、思い出せずに代名詞を使う。
こういう時、特定の役割を表す名詞って便利だよね。名前はわからなくても、あの花綺麗だねって、それで甘い言葉を囁けるんだから。
「フィルチチェ二世は、まだ若いってのに、立派な王様だよ」
そうそう、その人。
ふぃるちちぇ。なんだかとっても、舌を噛みそうな名前よね。
「前王…つまり、フィルチチェ様の父君は、その…庶民の感覚では理解し難いお方でねぇ」
うまく言葉を濁した彼女だったけど、まぁ、要するに、暴君だったってことね。かの有名な、フランスの王様のように。
パンがなければお菓子を食べればいいじゃない、と彼の有名な王様のお妃様が言ったという一説があるけれど。ここの前の王様は、なんて言ったのかしら？

記憶喪失的情報収集ー２２ー

「前王…ヒルデンハイツ五世様が崩御なされてから、フィルチチェ様が王位を継ぐまでに、また色々と騒がしくてねぇ」

なんか、名前だけは格好いいな、前の王様。ドイツの人みたい。

そして、またどっかで聞いたような話。世界は違っても、そこに生きる人間達の営みって、それ程変わらないのかな。

まぁ、中世とかでよく見られた、王位継承戦争っていう、民衆にとっては超が付く程の傍迷惑な奴ね。

「二年くらい情勢不安が続いて、その間に、隣国との小競り合いとかも加わって、そりゃあもう、大変だったのさ。この王都でも治安が悪くなってねぇ。物流も滞って、一日を生き抜くが精一杯だったのさ」

なんだか、とても不思議な感覚だった。

彼女の語る言葉の全てが、やっぱりあたしには、夢物語のようにしか聞こえない。衣食住に困らずに、それどころか余暇を楽しむ余裕まである現代日本の生活が骨身に染み渡っている身にとっては、食べ物に困るような、一日を必死に生きてきた人達の気持ちなんてわからない。

そう、敢えて喩えるのなら、テレビを見ている感じ。

かわいそうって。そう思う事自体が、あたしはずっと、傲慢な事だと思っていた。

記憶喪失的情報収集ー２３ー

「それでも、あたし達は希望を捨てずに生きてこれた。いつか、フィルチチェ様が平和な世界を与えてくれる。そう思えたからさ。そして今、あたし達はこうして生きて、平和な国で暮らしている」

この人の穏やかな微笑を見て、その感情は、間違っていなかったんだって、唐突に悟った。

不確かな未来を信じて、今を懸命に生きるその姿は、可哀想なんかじゃない。なんて美しく、なんて綺麗な微笑なんだろう。

今の彼女を見て、今の彼等を見て、どうして、可哀想なんて、そんな言葉が出てくるだろう。

「何かを心から信じられるって…なんかそれ、羨ましいです」

突然のあたしの言葉に驚いたように目を見張っていた彼女だったけど、やがて、そうだろう、って。

その時彼女が浮かべた笑みは、やっぱり、とても美しく見えた。

それから、沢山話した。

この世界のこと。この国のこと。家族のこと。

彼女達は、嫌な顔一つ見せずに和歌の質問に答えてくれた。

こんな、みょうちくりんな格好をした、どこからどう見ても怪しい人でしかない娘の、これまた奇妙な質問に、彼等は丁寧に答えをくれた。

一度として、和歌の素性を訊くことなく。

王道展開に物申す―１―

「できすぎてるって、思うのは…あたしが、捻くれてるから？」
真っ白いシーツが、視界の隅で風に揺れている。
屋上から沈んでいく夕陽を眺めていた和歌は、自嘲気味の笑みを浮かべた。
だって、こんなにうまい話ってある？
いきなり異世界に飛ばされて。武装した人達に追われて。お節介を焼いて助けた少年の家族に保護される。
どっかのありふれたファンタジー小説みたいじゃないの。
「で、この後少女は結局捕まって、お城に連れていかれて、牢屋とかに入れられるんだよねぇ」
だけど結局、なんやかんやで救い出されちゃったりするんだよね。それも、美形の部類に入る男の人に。
そんなストーリー展開、もう見飽きた。あまりにも王道過ぎて、面白みの欠片もない。
そもそも、そういうのって、フィクションだからこそ面白いんじゃないの？現実にいきなり知らない世界に飛ばされたら、ただ黙って助けられるのを待っていられるわけないじゃない。
誰もあたしを知らなくて、あたしは誰も知らないというのに、どうして誰かが助けてくれるって思えるの。未来なんて見えない。外れる確率九割の博打みたいな行動、選択なんてしないよ。
少なくとも、あたしはそんなのご免だ。
もし仮に、神様が、あたしを助け出してくれる王子様を用意していてくれたとしよう。
それでも、選択肢は変わらない。
あたしだったら、会いに行く。

王道展開に物申す―２―

「…なんて、ね。それは全部、人が作った物語の中での話。今が、現実」

王子様なんていない。口の悪い、とてつもなく失礼な男なら一人いたけれど。それは味方ではなく、次会ったら絶対殴ると決めた敵だ。

敢えて王子様という役に当て嵌めるなら、天使のような少年。そして、意地悪な継母じゃなくて、強くて優しい、お母さん。

夕陽が綺麗だ。ここからでも数個見える共通の台所に女性や幼い子供達が出てきて、美味しそうな匂いが漂い始める。

もうそろそろ夕飯の時間なのかなぁ、なんて呑気に考えていた和歌の耳に、夕食の準備とは到底思えない物騒な騒ぎが届いた。振り向いた瞬間、屋内へと続く扉が開かれ、そこからぞろぞろと、武装した武骨な男達が数人出てくる。

それはまるで蟻が巣から出てくるようだと、そんな事を頭の片隅で思った。

って、そんな事を思っている場合じゃない。

狭い入口から鎖の擦れ合うような耳障りな音を響かせながら屋上へ出てきたのは、あれよという間に総勢十五人にもなった。その全員が統制の取れた無駄のない動きで弧を描いて並び、手に持った槍の先を和歌に突き付けてくる。

これって、ひょっとしてひょっとしなくても、大ピンチってやつ？

ついさっきまで、王道過ぎる展開に飽きたとかなんとか語っちゃったけど、言ってるそばからこれってどうなのよ。

王道展開に物申す－３－

後ろは断崖絶壁、とかだったらまだドラマ性もあったんだろうけど、建物二階分程度しかない高さは、それでも飛び降りるにはちょっと躊躇われる。どっかの昔話みたいに清水の舞台から飛び降りて無傷で生還出来る自信も技量もない。魔法が使えたり、翼が生えた動物がいるような世界だったら話はまた別だけれど。

現実はそんな都合よくできていない。

対して、屋内へと続く扉の前には、屈強な男達と西日を受けてキラリと光る槍の刃先がある。

まぁ、要約すると、逃げ道はないって事だ。

とっても不本意だけれど、ここは大人しく捕まるしかないみたい。

「・・・・・・・・・・」

むすっとした表情で両手を上げる和歌の行動は、どうやら異世界の騎士達にもそのニュアンスは伝わったらしかった。構える槍はそのままで、数人が和歌を取り囲む。乱暴に腕を取られて背中に回されて、それは結構痛かった。

「ちょっと！女の子を乱暴に扱うんじゃないわよ！ここの男達には、レディ・ファーストの精神はないの！？」

油断していたとはいえ武装した騎士集団をものの数分で地に沈めた女子に、果たして淑女の素質があるのかどうかという論議はこれまた別の話だ。ここで問題となるのは、相手に思いやりがあるかないかという、この一点のみである。

王道展開に物申す－４－

そして、どうやら彼等には、末端とはいえ国家に仕える兵士に逆らった女の子に掛ける情けはないようだった。
抗議した瞬間に苛立ちを含んだ平手を一発頬に貰えば、甲高い音が夕闇の落ち始めた高い空に響き渡る。衝撃が薄れた頃に痛みが這うようにやってきて、目の前に立つ騎士を睨み付けた。
「…殴ったわね？親にも殴られたことないのに」
「口を閉ざせ、罪人よ。これからもっと殴られる事になるのだ。覚悟するがいい」
にやり、と。意地の悪い、粘着質の笑みを浮かべて真面目に返してくる騎士Ａさん。
「・・・・・・・・・」
ここ、本当は笑うところなのよ？
だけど、文化の相違って淋しいものね。あの超有名なアニメを知らない彼等には微妙な笑いのセンスがまったくといっていい程伝わらない。
せっかく、腹の底から濁流のように湧き上がってくる怒りをなんとか鎮めようとしてあげているのに、神経を逆撫でするような物言いをするんじゃない。
っていうか、この人達、己の無様さに気付いているのかしら？
何処からどう見てもか弱い普通の女子高生にしか見えない女の子一人を、堅牢な甲冑と凶暴な槍で武装した男達が総勢十五人も束になって包囲しているなんて、無様以外の何物でもないわ。
相手を傷つける為の武器も、己の身を守る盾すらも持たない丸腰の相手に槍を向け、手を上げた瞬間から、あんた達はもう、国を守護する敬虔な勇士ではなくなった。今はただ、被った雪辱を晴らそうと躍起になっている、野蛮人の集団よ。

王道展開に物申す―５―

なんて、言いたいことは沢山ある。それこそ、一日二十四時間あっても足りないってくらいにね。ここが表現の自由が法律で保障されている場だったら、この脳みそに詰まっている言葉全て使って思いの限り罵ってやるところなのだけれど。

でも、今はその選択が愚の骨頂だということぐらいわからない程馬鹿じゃない。

彼等は自分に、憎悪にも似た怒りを向けている。

興奮した野生動物を前にした時と同じだ。下手に刺激すれば、それは全部自分の身に返ってくる。

人間は理性の働く生き物だ。本能のまま欲情を吐き出した後に支払う代償の大きさに、欲望を抑制することぐらい可能だ。

怒るべき時は、今じゃない。

そう、今じゃないだけだ。怒らないわけじゃない。怒りを爆発させる時が、場所が、今ではなく、ここではないだけだ。

やられたら、徹底的にやり返せ。

それが信条だ。

今決めた。

「カズさん…」

屋上から飛び降りるなんて真似しなくても玄関から外に出た和歌の背に、怯えたような呼び声がかけられる。足を止めて振り返れば、家の前で互いに身を寄せ合って立つガーネとその母親の姿があった。

「――大丈夫」

強がりがなかったと言えば嘘になる。

だけど、こんな、得体の知れない小娘を快く受け入れてくれた彼等に弱い姿なんて見せられなかった。後ろ手で縛られ、自由を奪われた身を兵士達に囲まれながら、笑顔のまま、毅然とした態度で去っていくことが、彼等に対する、今の和歌が出来る唯一の、そして

最大の恩返しだ。
ありがとう。
助けてくれた事への感謝の言葉でもない。
ごめんなさい。
迷惑をかけた事への謝罪の言葉でもない。
それはどちらも、別れの言葉だ。
澄み渡った空が揺れる。
男の子なんだから泣くなよ、なんて苦笑するくらいには余裕はあって、泣き顔を見まいと和歌は背を向けた。
沈んでいく夕陽。それが、とても綺麗だと思った。

＊＊＊

予言の乙女ー１ー

てっきり、鉄格子のはまった薄暗い地下牢へでも連れて行かれるのかと思った。

いや、多分、この、女子高生一人を武装した数人で取り囲んでいる無様な方々は、最初はそのつもりだったんだと思う。だけど、中世ヨーロッパのような立派なお城の入り口で隊長格らしいおじさんに耳打ちする人が現れて、完全に予定が狂わされたらしい。

伝令を持ってきた、こっちはなんだかローマ時代の人が着ているようなゆったりとした布に身を包んだ人に案内されていく和歌を見るおじさん達の様子が、悔しそうでありながらも驚きを含んでいる事が少し引っかかったけれど。

どうしてあんなに驚いていたんだろうかと、このただっ広い空間に一人ぽつんと残されてから数分だか、十数分だか。

地下牢ではなく、こんな、大広間みたいな部屋に通された理由も含めて考え続けているが、答えなど出るはずもないのだ

わかんない。わかんないけど、どうしてって考えないなんて事も出来ない。だって、話し相手もいないのよ？それとも何？あたしに、独りじゃんけんなていう淋しい真似でもしろとでも言うの？確かにあれ、脳のトレーニングにはいいだろうけれど。

ここで脳トレする程、あたし、楽天家じゃないのよ。

「っていうか、いつまでこんな所で待たせる気？しばらくっていう言葉の使い方、間違ってるわよ」

ここに案内してくれた中年の格好いいおじさまは、しばらくお待ちくださいって恭しく頭まで下げてくれた。あんな風に畏まれる事なんて、この十六年間生きてきて一度としてなかったから、ついつい殊勝に頭を下げて従っちゃったけど。

少なくとも、十分くらいは待った。

それとも、日本のしばらくという時間感覚と、こちらの世界では

違うとでもいうのか。
ここでもまた、軽いカルチャーショック。

予言の乙女－２－

いい加減、この場に満ちる、澄んでいるけれど何処か刃を潜ませたかのような不気味な空気に嫌気が差してくる。怖くなる、と言った方が正しいかもしれない。

だって、ここは、あたしが今までいた、平和ボケした日本とは決定的に違うのだという事実を、突き付けてくるのだから。

生存本能は未だ衰えていないらしい。どんなに平和な日本に暮らしていたとしても、わかる。

ここに満ちるのは、生と、その脆弱な光を呑み込もうとする、強大な死の気配。

今にでも、影になっている柱の闇から巨大な鎌を持った死神が現れて、無防備なこの命を刈り取っていってしまうのではないかと、そんな非現実的な幻想に囚われる。今まさに非現実的な現実に晒されている身としては、それはただの空想だと笑い飛ばす事など出来るはずもなかった。

そろそろ本気で自分から動こうかと、和歌の中にそんな考えが浮かぶ。

そうよ。こうしてただ待っているなんて、あたしらしくない。ここが何処だろうが、それこそ死神が出てこようが、この拳で追い払ってやるわ。うん、そうしよう。

って、決心して立ち上がろうとしたところで、タイミングがいいのか悪いのか。ついさっきまで貝のように硬く閉じていた扉が開くのだ。

勢い余って和歌は転んだ。腰をしたたかに打ちつける。

これは、かなり痛い。

「・・・・・・・・・・」

腰に手を当てて激痛に声も出ない和歌の姿に、両側に開かれた扉から現れた人影が戸惑う気配が辺りに漂う。けれど、なんともいえ

ない沈黙に対処出来る程、今の和歌には余裕がなかった。
まるでマンガみたいな展開だと、和歌は思う。
それも、ギャグマンガ。どうしてあたしが、こんな異世界に来てまで道化の真似をしなければならないのか。別の意味で泣けてくる。

予言の乙女ー３ー

「…大丈夫か？」

自分を取り戻したのか、些か駆け足気味で駆け寄ってきてくれた人影が労いの言葉を発する。手を差し出され、顔を上げた和歌は、自分の視覚を疑った。

王子だ。王子がここにいる。

ストレートの銀髪はしなやかさと柔らかさをもって肩を流れる。少し憂いを含んだ表情、そこに配されたそれぞれのパーツは小数点三位くらいまで正確に測ったかのように小さな白い顔の上に乗っている。薄い唇は慈悲の笑みを湛え、銀の瞳は長いまつげによって少しだけ影を落としている。

恋愛マンガ好きの友人ならば、今頃目をハートに変えて見惚れているに違いない。

まさしく、これぞ創造主の傑作。美の集大成。

ここに来て、この目で見るのはこれで二人目だ。

何？この世界は美形揃いなの？

たとえば、神様が二人いて、自分達の考え得る美の要素を詰め込んだ人間を造って、地上でイケメンコンテストでも開催するつもりなのかしら？

それとも、もう開催してたりする？あたしにも、ひょっとして投票権があったりしたりして？だって、この世界がどれだけ広いのか知らないけど、こんな短時間で神様から最高の美を与えられた二人に会うなんて、偶然で片付けるにはちょっと無理があると思うわけよ。だからって、運命の出会い！なんて目を輝かせる程乙女チックでもないつもりよ。

だけど、やっぱり、天は人に二物を与えないと思うのよね。だからきっと、この、王子様っていう表現がかすむ程の美形の青年だって、性格が最悪のはず…。

「大丈夫か？随分と待たせてしまったが、それを怒っているのか。
それとも、近衛隊が手荒な真似をして何処か怪我を？」
予想外の労いの言葉に、和歌の思考は停止する。

予言の乙女－４－

「近衛隊の対応については心から謝罪する。すまなかった」
思考のフリーズは、更に頭まで下げられれば永久凍土並みに凍りつく。
「君に一時でも刃を向けてしまったのは私の失態だ。謝って許されるものでもないかもしれないが、私には、こうして頭を下げるほか術がない」
自分を凝視したまま沈黙を通す和歌の態度を、怒りによるものだと勘違いし続けている彼の、肩を流れていく銀髪を素直に綺麗だなと思いながら、和歌の思考はようやく、ゆっくりとでも動き出した。
「あ――…いえ、その…」
性格が最悪だとか呆けた事をぬかしたついさっきの自分を殴りたい。全力で殴りたい。いや、寧ろ殴ってください。
「アタシも、悪かったかなぁ…なんて。頭に血が上っていたとはいえ、ちょっとやりすぎたかなって…思ってるし」
なんて素敵な好青年だろう。
顔もよし。性格もよしとくれば、それはもう完璧ではないか。
大人が、一介の女子高校生にこうも丁寧に謝罪してきてくれたら、これはもう、許すしかないじゃない。向こうが素直なら、こっちも素直になるのよ。
他人は自分を映す鏡って言うしね。
「だから、その…できれば、頭を上げてほしいんですけど…って、何！？」
和歌の望み通り彼は頭を上げてくれた。だけど、がし！っていう効果音が相応しい勢いで手を掴まれて、和歌は軽くのけ反った。
「なんと心の広い女性だろうか。こんなにも肌が白く、か弱い女性に刃を向けたというのに…。こんな不甲斐ない私を許してくれると言うのか」

「え…？あの、ちょっと…ッ！？」
今度は頭を下げられたりしなかったが、その代わり、何故か足元に片膝をつかれた。立ってくださいと伸ばしかけた手を目の前の好青年にそっと取られ、和歌はまた動揺する。

予言の乙女ー5ー

「清い心を持つ乙女へ、感謝する」
そして、あろうことか、掌に口付けを落されてしまった。
ねぇ、これで、茫然とするなっていう方が無茶な注文だと思わない？だって、こんな、中世の騎士の様な礼を、超現代っ子な日本の女子高校生が受けちゃってるのよ？
「ありがとう」
その上、斜め下からふわりと王子の笑みを贈られたら、流石のあたしも頬くらい染めるわよ。
一人目の美形が腹黒大王だったから余計に今目の前にいる美青年がいい人に見えるのかもしれないけど、やばい。あまりの笑顔の眩しさに目が開けられなくなってきた。何処かにサングラスとかありませんか？
向けられる笑みが眩しくてそっと目を逸らすその仕草は、中世の騎士のように跪く彼には恥じらっているようにしか映らない。
くすり、と笑みを洩らし、優雅に立ち上がった銀髪の青年は何処か嬉しそうに笑った。何故か、和歌の手を握ったまま、だ。
「貴女のような素敵な人が予言の乙女でよかった。この出逢いを、私は神に感謝しよう」
顔の前でなにやら複雑な動きをした手が行きつく終着点は胸元だ。掌を軽く握り、綺麗な銀の瞳が瞼の裏へと隠される。何やら呟いていたけれど、これだけ近くにいる和歌にすら聞き取れない程の小さな声だった。
視線が逸らされた事で少しは和歌の動悸も収まってくる。どうして手は握られたままなのかなぁ、なんて考える余裕もようやく出てきた所に、何やら聞き捨てならない単語が飛び込んできた。
よげんのおとめって、何？
よげん…四限…四元…予言？

・・・・・・・・・予言？

何やら、とってもいや～な予感がするんですけど。

予言の乙女ー６ー

「ほっほっほ。陛下、そのように言葉を重ねては。ほら、困っておいでですぞ」

扉は開いたままだったらしく、背後から聞こえた声に和歌はゆっくりと振り向く。

そこには、これぞまさにギネス記録挑戦中か？と疑う程の長い髭をたくわえたお爺さんがいた。ゆったりとした服の裾で床を掃除しながら近付いてくるお爺さんは、中国の山奥にでも住んでいるという仙人みたいだ。

「あぁ、そうだったな。すまない。つい感激してしまってな。なにせ、待ち望んでいた乙女だ」

これで興奮しない者はいないだろう、と。まったく自分に非がないと信じ切っている美青年改めどこかの国の王様は、これまた美に忠実な太陽のような笑顔を浮かべた。覗いた白い歯が、キラリ！と光ったのは、絶対に見間違いではないと思う。

っていうか、本当に王子…じゃなかった。王様だったのね、この超イケメン君は。

「ほっほっほ。左様でございますか。しかし、陛下。それは、乙女の手を握り続けている理由にはなりませんなぁ」

流石、と言うべきだろう。多分きっとお目付け役か何かだろうお爺さんは、この王子様…もう王子様でいいよね。扱いに慣れている。

「本当に、ラフォットは細かいな。いいじゃないか、手を握るのにいちいち理由などいらないだろう？」

いや、よくない。

男子と一緒によくやんちゃをした覚えはあるけれど、女の子扱いに慣れていない和歌にとっては、手を握られる事は断じて細かい事ではないのだ。

予言の乙女－７－

「あの、すみません」
ようやく自分を取り戻してきた様子の和歌は、未だ手を握ったままのイケメン王子に声を掛けた。
「あぁ、すまない。君の存在を無下にしてしまった。ここは御詫びの口付けを…」
「いえ、それは結構です。だから、いい加減手を離してください」
一度は立ち上がった彼が再び片膝をつこうとするのを制した和歌はただ、己の希望を口にしただけだった。
それなのに、何故こんなにも空気が凍ったのだろう。この広い室内に佇むちっぽけな人間二人は、まるで時間を止めてしまったかのように微動だにせずに和歌を見つめてくる。
流石の和歌も少々困惑した。
ここは日本ではない。口付けというのはこの国では謝罪の証であり、それを断わるという事は許さないと言ったも同然という可能性はあるまいか。
そこまで考えが及び、和歌は雷に打たれたような衝撃を受けた。
「あ…あの、別に、ですね。あたしは怒っているとかじゃなくて、ただ、その…あの、何て言いますか…」
なんとか相手を傷つけずに巧くかわす言い回しはないだろうかと、元々ない国語力を精一杯活用して頭の中の単語辞書を調べてみたけれど、無駄だった。
あぁ、もう。面倒くさい。
「とにかく、あたしは怒っていないし謝罪もいりません。だから、手を離して」
言いたい事ははっきり言う。それが和歌の信条だ。
嫌な事は嫌だと言わずに、ずるずると引きずっている方が、後々人間関係に悪影響を及ぼしてくる。そんな些細な事でせっかく築い

た人間関係が壊されるくらいなら、最初にきっぱり言っておいた方がいい。それで相手に不快な思いをさせたら、その事に関してはこちらがちゃんと謝ればいいのだ。

相手に合わせるだけが優しさじゃない。

予言の乙女－８－

イケメン王子君の顔面に人差し指を突きつけて言い終わると、なんともいえない沈黙が待っている。怒りや悲しみといった負の感情の蔓延とはまた少し違った、強いて表現するのなら、呆気に取られているといった感じだろうか。

言いたい事は全て伝えた。それでも相手方の反応がないのなら、結局和歌も沈黙するしかない。

どれくらいの時間が無音で過ぎていったのだろうか。これも明らかに幻聴でしかないのだが、時計の針が刻まれてる音が耳に響いてくる。それ程に、この沈黙は長く、そして少し奇妙に感じた。

「あの…」

「聞いたか、ラフォット！」

何とも居心地の悪い沈黙に耐えかねて口を開きかけた和歌を、王子の興奮した声が遮った。背後を振り返った彼の銀髪が流れ、天窓から差し込んでくる陽光を弾いて煌く様が美しい。

漫画風に効果音をつけるのなら、キラキラといった感じだ。

「この私に、離してと命令してきた。何とも新鮮な気持ちだ」

ラフォットという名らしい髭長お爺さんは、どんな顔をしているのだろう。何だか背後に薔薇を幻視しそうな勢いで興奮している王子様で、和歌からはその表情を窺い知る事は出来なかった。返す声もなかった為、判断材料がない。

推測するに、何かしらのノンバーバルなサインは貰ったのだろう。イケメン王子は興奮冷めやらずといった様子で、何やらしきりに頷いたりしている。こうして見ると、まるで新しい玩具を買ってもらえた子供の様に見えた。

そして、何気に未だに和歌の手を握ったままだったりする。

予言の乙女－９－

「・・・・・・・・・」

無邪気に喜ぶ、たとえその理由がよく理解出来ていなかったとしても、その純粋さに微笑ましいとも思う。見ようによってははちきれんばかりに振られる尻尾すら見えそうで、それはそれで可愛いとも思う。

けれど、それよりも何よりも、優先される感情はきっとこれだ。

「あの」

自分でも信じられないくらいの冷めた声で彼を呼んだと思う。

「何だい？麗しき乙女」

けれど、和歌の手を握ったままの彼は他者の感情を読み取ることが苦手なのか、或いは興味がないのかは知らないが、無邪気さをそのままで輝かせた銀の瞳が和歌を映し出す。

その瞳の中にもキラキラと輝く星が見えるような気がして、とにかく全身に煌きを纏っている彼が本当に眩しくなってくる。

あなたは少女漫画に出てくるイケメン君ですか。それともあれですか。それは後光なんですか。

本気でサングラス、かけようかな。

「あたしの話、聞いてました？離してと、これで三回目なんですけど」

子供のような無邪気さを纏っていた彼でも、流石に和歌の尋常ではない様子に気付いたようだった。呆然としたような、されどその中にやはり好奇心を散らした銀の双眸が瞬きを繰り返す。

それでもやはり和歌の願いは叶えられることはなく、盛大な溜め息をついた彼女は今度は言葉を駆使しなかった。己の手を握っている彼の手を乱暴に払い除ける。仏の顔も三度まで、言葉でわからない人に実力行使に出ても文句は言えまい。

振り払われた手をそのままに未だ固まっている彼に、和歌は綺麗

な笑みを浮かべて見せる。私は悪くないと、無言の圧力に果たして相手は気付くだろうか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2594p/

慟哭を射よ！　第一話　呼ばれて異世界、意味不明！

2011年11月5日23時21分発行